



谷崎潤一郎文庫

細雪Ⅱ

初昔 月と狂言師

年譜

他一篇

大興出版



谷崎潤一郎文庫

八八〇円

細雪 2

昭和四十八年二月二十七日 発行

著者 谷崎潤一郎

発行者 吉川文子

印刷 大日本法令印刷

製本 手塚製本

発行所 六興出版

東京都文京区水道二一九―二

郵便番号 一一二

電話〇三(九四三)三四三一

振替 東京九二四四八

© 1973 MATSUKO TANIZAKI, Printed in Japan.

落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393-02411-9216

目次

細雪 下巻

初昔

月と狂言師

過酸化マンガン水の夢

年譜

注解

解説

三

三三

二七五

二九一

三〇五

三三七

三三九

監

修

野 谷

村 崎

尚 松

吾 子

細^{きさめ}

雪^{ゆき}

下
卷

一

雪子は二月の紀元節の日に関西へ来てから、三、四、五と、今度はほとんど四ヵ月も滞留するようなことになって、当人もいつ帰ろうという気もなくなったらしく、何となく蘆屋に根が生えてしまった形であったが、六月に入ると間もなく、珍しいことに東京の姉から縁談を一つ知らせて来た。「珍しい」というのは、それが実に一昨年の三月、陣場夫人があゝの野村という人の話を持って来て以来のもの、——二年三ヵ月目の縁談であるという意味でもあるが、また、ここ数年来、雪子の縁談といえはいつも幸子が聞き込んで東京の方へ知らせてやるのが恒例のようになっており、本家の夫婦は義兄が一度手を焼いてからついぞ積極的に心配しようとはしなかったのに、今度は義兄が先ず動いて姉に話し、姉から幸子へ知らせて来たというわけで、その意味に於いても珍しいのであった。もっとも、幸子宛てに來た姉の手紙を読むと、少し頼りないようなところもあって、飛び着くほどの縁談とも云えないのであるが、ありようは、義兄の長姉が縁付いている大垣在の豪農に菅野という家があり、その菅野家が昔から懇意にしてい

る、名古屋の素封家に沢崎というのがある、この沢崎家は先代が多額納税議員をしていたくらいな、聞えた家柄なのだそうであるが、今度菅野の姉の斡旋で、その家の当主が雪子との見合いを望んでいるのであるという。そういえば、菅野の姉という人は、辰雄の兄や姉達の中では一番幸子たち姉妹をよく知っている関係にあった。幸子はたしか二十歳の時、辰雄や、鶴子や、雪子や、妙子たちと一緒に長良川の鞆へ行った帰りに菅野家へ寄って一泊したことがあり、それから兩三年後にも一度、やはり同じ顔触れで、茸狩に招かれたことがあった。彼女は太垣の町から自動車で二三十分も田舎道を行ったこと、ほんとうに淋しい村落の、県道らしい往還の道端から出て奥深い生垣の径を行つた突きあたりに門構えのその家があったこと、近所にはほんの五六軒の佗びしい百姓家があるだけであつたが、関ヶ原の役以来という菅野の家は宏荘な一郭をなしていて、持仏堂の堂宇が、中庭を隔てて母屋と棟を並べていたこと、苔蒸した泉石の彼方に裏庭の菜園がつづいており、秋に行つた時にはその栗の樹に栗が沢山実つていたのを、小女たちが枝に登つて落してくれたこと、御馳走といつては手料理の野菜が主であつたけれども、それが大変おいしく、味噌汁の身に入れてあつた小芋と、煮付けの蓮根が殊に美味であつたこと、などを覚えていたのである

が、義兄の姉にあたるその家の女主人が、今では未亡人になっていて、気楽な身分でもあるまいか、幸子の次の妹の雪子が未だに結婚もせずにいる噂を耳にし、何とかよい縁を見付けて上げたいと云っているのだということは、かねがね聞いていないでもなかった。で、今度の話はその未亡人の世話好きから起こったことらしいのだけれども、いたい沢崎家の当主というのはどんな人なのか、それが雪子と見合いをしたいと云い出したのには、どういふいきさつがあるのか、鶴子の手紙はその辺の書き方が簡単であった。ただ、菅野の姉さんの所から、沢崎氏を雪子さんに会わせたいから、とにかく雪子さんを大垣まで寄越してもらいたいと云って来た、沢崎家は数千万円の資産家で、今日の蒔岡家とは格段の相違があり、不釣合過ぎて滑稽のようだけれども、先方は奥さんに死なれて、二度目のことでもあり、すでに阪神間へ人を遣って蒔岡家の家柄や雪子ちゃんの性質や容姿などを相当調べ、その上で会見を希望して来たらしいのであるから、満更の話ではないように思われる、何にしても菅野の姉さんが折角そう云って来てくれた好意を無にしては、兄さんの立ち場が困る、菅野では、さしあたり雪子さんを寄越してくれさえすればよいので、先方に関する委しいことは後で知らせると云って来ているから、どういふ事情か分らないけれども、文句を云わずに会

いに行かして欲しいのである、それには、雪子ちゃんも大分其方の滞在が延びていることだし、一遍帰って来てもらいたいと思つていたところであるから、帰京の途中立ち寄ることにしたらどうであらう、別に誰が附いて来るようにとも云っていないし、兄さんは忙しいと云っているから、私が此方から出向いてもよいが、すまないけれども幸子ちゃんが附いて行ってくれると都合がよいのだが、………どうせ儀式張ったことではなく、ちょっと会わせるだけのだろうから、気軽に、遊びに行くつもりで連れ出してもらえないか知らん、というのであった。

そんな工合に、姉は無造作に云っているけれども、果たして雪子ちゃんが「行く」と云うであらうか。――幸子は先ずそう思つたので、最初にその手紙をそつと貞之助に示したが、貞之助も何か唐突過ぎるような、いつもの姉に似合わない非常識なところがあるような感を抱いた。なるほど、名古屋の沢崎といえど大阪辺りにも聞えている家で、何処の馬の骨だか分らないというようなものではないが、それにしても、雪子に会いたがつているという当の相手がどんな人物か、全然調べても見ないで、向うの云うなりに雪子を差し向けようというのは、軽率という批難を免れないばかりでなく、向うがそういう身分違いの資産家であるだけに、此方が不見識のように見えはしないか。雪子はそ

れでなくても、今まで幾度も見合いをしては断つてばかりいるので、今後は見合いをするまでに十分先方を調べてくれるようにと云っており、本家の姉もそれはよく知っているはずなのである。貞之助は、どうもこの話は少しおかしい、と、翌日事務所から帰宅するとそう云ったが、彼はその日心あたりの方面へ二三問い合わせて、沢崎家の当主のことを聞けるだけ聞いて来たのであった。そして、当主というのは早稲田せだの商科出の本年四十五歳ぐらいの男であること、彼が妻を亡くしたのは二三年前のことであり、その妻は某堂上華族の出であったこと、亡妻との間に二人か三人子供があるはずであること、貴族院議員をしていたのは当主の父親であるが、資産状態は今も決して悪くはなく、先ず名古屋附近で屈指の富豪の中に数えられるであらうこと、——等々は大体分ったけれども、当主の人物や性行など、細かいことに就いては誰もはっきりした返事をしてくれなかった、と云い、何にしても華族と縁組をするくらいな千萬長者が、二度目とはいいながら、没落した蒔岡家の娘を貰つてもよいと思つていふことが、腑に落ちない、それが本当とすれば、何かしら先方に対する縁組ができないような欠点があるのかも思えるけれども、まさか菅野の未亡人がそんな所へ雪子ちゃんを世話するつもりでもあるまい、というのであった。それで、考えられ

ることは、やはり器量好みということ、——純日本式の、昔の箱入り娘風の感じの人をという注文で、金に飽かして捜さしていたところへ、たまたま雪子のことを聞き、ではともかくも会つて見ようという好奇心を起こしたか、或いはまた、蘆屋の家では母親以上に姪ひめから慕われているそうだから、いつも母親に代つて姪の面倒を見てやっているのだとか、いうような評判が耳に這入つて、そういう人なら先妻の子供を可愛がつてくれるであらう、子供との折り合いさえよければ他のことはあえて問わないという、案外真面目な動機から雪子に目星を付けたのであるが、まあその辺より外にないのであるが、おそらくこの二つのうちの前者ではあるまいか。蒔岡家の娘はこれこれの器量であると聞いて、どんな顔つきだか見てやろうという程度で、軽い好奇心を湧かしたので、会つて見ても損はあるまいといった風な、冷やかし半分の気持ちではないのかと思えるのであったが、本家がそれらの点を十分に突き止めもしないで、その申込みを雪子に受諾させようとするのは、察するところ、辰雄が菅野の姉に対して「いや」ということが云えないからであるらしかつた。種田家の末子に生れて蒔岡家へ養子に來た辰雄は、今でも実家の兄達に頭が上まらない様子なのであるが、兄弟じゅうでも一番年長である菅野の姉は、辰雄の眼からはほとんど母か叔母おかしなのように

見え、彼女の云うことは彼には半ば命令的に響くのであろう。雪子ちゃんは定めしい返事をしないであろうが、そこを曲げて承知するように、幸子ちゃんから説き付けてほしい、話が成立するしないは二の次として、とにかく行かしてだけくれないと兄さんが困る、と、手紙にはそう書いてあるのであった。そして、今度の話はあまり途方もなさ過ぎて望みのないような気がするけれども、縁というものはそういったものでもないし、何かにつけて菅野家の好意を受けておくことは、雪子ちゃんのために悪からうはずのないことだから、とも附け加えてあるのであった。

と、この手紙に追いかけて、菅野からも手紙が来た。辰雄の方へ云ってやったら、雪子さんはそちらに行っておられるとのことだから、廻りくどい方法を取るよりも思つて、直接お打ち合わせする。大体のことは鶴子さんからお聞きの通りであるが、実はそのことはそんなに重くお考えにならない方がよい。それよりは、あれきり皆さんにも久しくお会いしないから、幸子さん、雪子さん、妙子さん、それにまだお目にかかったことのない悦子さんというお嬢さんもお連れになって、遊びにいらしていただきたい。田舎は十何年前と大して変わってもいないけれども、これから螢狩の季節である。この辺は別に名所となっているわけではないが、もう一週間も立つと、この近所の田圃の中の名

もない小川のとおりでも、闇に飛び交う螢の景色が随分美しい。茸狩や紅葉狩などと違って、これはきつとあなた方にはお珍しい見物であろう。螢は季節が短くて、今から一週間目ぐらいがちようどよく、それを過ぎると駄目になるのである。それに天候の工合もあって、あまりお天気がつづいた時もよろしくないし、雨天でもないけない、雨の降った明くる日あたりが最もよいのである。ついてはこの次の土曜日曜の二日をそれに当てておいて、土曜の夕刻までにおいで下さったらどうであらうか。そうすれば皆さんの御滞在中に、ちょっと雪子さんが時間を割いて沢崎氏と会われるように取り計らうであらう。今のところどういふ風な都合になるか分らないが、多分沢崎氏が此方へ訪ねて来てくれて、私の家で会う、というようになるだろうと思う。それも三十分か一時間で済むのであるし、そういっても当日沢崎氏に差支えがあるかも知れないから、それはどうなつてもかまわないとして、螢狩の方を主にしてお越し願ひたいのであるが、——と、未亡人はそう書いて来たが、おそろくこれは彼女からも直接すすめてくれるように、東京の方からも云つてやったものに違ひなかった。幸子は、「あまり途方もなさ過ぎて望みがない」などと云いながら、義兄も姉もお腹の中はそうでもなく、案外夢のようなことを本気で願っているのではないかと考えられた

が、そういう彼女も、近頃雪子の縁談についてはひどく弱気になっていたので、この話を無下に斥けてしまふ勇氣はなかった。もっとも、四五年前にもこれによく似た身分違いの方面から雪子を望まれ、皆が飛び着いて調べて見ると、先方の家庭に不倫な事件のあることが知れて、愕然としたことがあったので、貞之助は、今度もあれのようなのではなからうかと疑い、菅野未亡人の好意は分るが、何だか少し人を馬鹿にしたようなところがある、順序も踏まないで、出し抜けに、会ってやるから出て来いなどというのは失敬ではないかと、憤慨したような口調で云ったが、でも、何といつても今度の話は二年三ヵ月目の、久し振りの縁談なのである。幸子は、二三年前までは降るほどあった申込みが急に跡絶えるようになったことを思い、その原因が、昔の格式に囚われて不相応に高い望みをかけ、来る話来る話を片っ端から断つてしまったことにもあるが、一つには妙子の世評の悪いことが影響を及ぼしているのだと思うと、どうしても自分に責任の一半があるように感じられて、気が咎めていたのであったが、これはその矢先に持ち込まれた話なのである。一時は、もうすっかり世間の同情を失い、誰も縁談など持って来ないようになったのかとまで悲観していた彼女に見れば、たとい望み薄な、アヤフヤなものであったにしても、これを頭から撥ね付ける

ようなことをしては、また世間の反感を買いはしないか、という危懼があった。今度の話に応じれば、不成立に終ったとしてもこれをきつかけに後の話が出て来そうだけれども、これを断つたら、また当分何処からも持つて来なくなるかも知れない、まして今年は雪子が厄年なのではないか、という風に思えた。それに、義兄夫婦の腹の中を可笑しがる彼女にしても、あなたがちこの話を「夢のような」とばかり卑下するにはあたらない、という気も何処かにあった。夫は警戒した方がよいと云うのであるが、ほんとうにそんなものであろうか、その沢崎という家がどんなお金持ちか知れないが、二度目で、子供が二三人もある男に比べて、そんなに滑稽扱いするほど雪子ちゃんが見劣りするであろうか、蒔岡家だって由緒正しい家であるのに、という風にも彼女は云って見たかった。そして貞之助も、そういう風に云われてしまうと、それには言葉を返し得ず、そう此方を安っぽく見ては泉下の養父に対しても相すまないし、雪子にも氣の毒のように思えるのであった。

夫婦はまる一と晩考えて、とにかく雪子が何と云うか、雪子次第にするのがよろしかろうという結論になったが、翌日幸子から、二通の手紙の要領を話してそれとなく意向を尋ねると、これは思いの外にそういうような様子でもなかった。例の通りで、行くとも行かないとはっきりした

返事はしないのだけれども、幸子には「ふん」とか「はあ」とか仄かに受け答へするだけである雪子の言葉のはしほしに、何となく会得できるものがあつた。彼女は、この気位の高い妹も、やはり内々は焦躁を感じており、一と頃のよう「見合い」に対してそう気むずかしいことを云わないような心境になっているのかも知れない、と察した。それに、彼女は雪子にその話をするのに、自尊心を傷つけそうなことは云わないように努めたので、雪子にして見れば、その縁談を不釣合とも滑稽とも感ぜず、まして冷やかし半分であるなどとは思はずもなかった。いつもなら、先妻の子供があるなどと聞くと、その子供達の出来不出来だの、年恰好だのを、相当問題にしたがるのだけれども、今度はそういうことにもあまりこだわらず、どうせ一遍東京へ帰らなければならぬのだから、皆で大垣まで送つて来てくれるなら、螢狩もいやではない、という風な口ぶりなので、やっぱり雪子ちゃんはお金持ちの所へ行きたいのかたと、貞之助は云った。で、幸子は菅野の未亡人に宛てて、それでは御好意に縋つてお招きを受けることにしたから万事よろしくお願いしたいこと、当人も快くそのお方にお目にかかると云っていること、お伺いするのは私と、雪子と、妙子と、悦子の四人であること、但し、勝手を申し上げてすまないけれども、悦子は長い間病氣をし、この間床

上げをしたところで、引きつづき学校を休んでいるので、此方の都合は、今度の土曜日曜よりも、金曜土曜の方がいいこと、見合いのことは悦子には知らせないようにしたいので、どこまでも螢狩ということにしておいていただきたい、その点お含みを願いたいこと、等々を云つてやつたが、日を一日繰り上げたのは、大垣から真つ直ぐ東京へ帰るといふ雪子を、三人が蒲郡まで送つて行こうということになつたので、金曜日に菅野方へ泊り、土曜日には常磐館まで延すことにしたからであつた。そして、日曜の午後、蒲郡で東西に別れてその日のうちに帰宅し、悦子を来週の月曜から学校へ行かせる、という予定にしたのであつた。

二

幸子は、夏の汽車は洋服にしたかつたのだけれども、「見合い」の件があることを慮つて、博多の袋帯に暑苦しさを感じながら、悦子と大して変らないような子供っぽい簡単な洋服を着ている妙子を羨ましがった。雪子も、時節柄といい、乗合客の眼を惹くような身なりをするのはいやだったので、衣裳は別に鞆に詰めて持つて行きたかつたのであるが、何分にも打ち合わせがよくできていないので、ひょっとすると、向うへ着くともうその人が待っているというようなことがあるかも知れない、旁々支度をして行つた方

がよいであろうということになって、これはひとしお着附けに念が入っていた。出がけに大阪まで省線電車と一緒にあった貞之助は、向う側にかけた雪子の姿をしげしげと見守りながら、

「若いなあ」

と、今更のように幸子の耳元で嘆息を發したが、ほんとうに、これを三十三の厄年の人と見る者はないであろう。細面の、淋しい目鼻立ちのようだけれども、厚化粧をしないと実に引き立つ顔で、二尺に余る袖丈の金紗とジョウゼットの間子織のような、単衣と羅衣の間着を着ているのが、こっくりした紫地に、思切切って大柄な籠目崩しのところどころに、萩と、撫子と、白抜ききの波の模様のあるもので、彼女の持っている衣裳の中でも、わけて人柄に欲まっているものであったが、これは今度のことが極まると同時に東京へ電話をかけ、わざわざ各車便で取り寄せたのであった。

「若いでっしやる」

と、幸子も鸚鵡返しに云って、

「——雪子ちゃんの年で、あれだけ派手なもん着こなせる人はあれしませんが」

雪子は自分の「若さ」が話題にされつつあることを感づいているらしく俯向いていたが、ただ、難を云えば、あの眼の縁の翳りが、この頃はほとんど始終消えないでいること

であった。幸子は、たしか去年の八月であったか、ペーターの出帆を見送りに、悦子を連れて雪子が横浜へ立つという前の晩、久し振りで彼女の顔にそれがうつすら現れたのを認めたのであったが、あれから此方、時々そのシミが濃くなったり薄くなったりすることはあるけれども、完全に消えてしまうことはないようになった。勿論薄くなっている時は、知らない者には分らない程度であるが、気にする者には非常に微かに痕が残っていることが分った。それに、以前は月の病の前後に濃くなる傾向があり、大体週期的に現れるようであったのに、近頃は全く不規則になつて、どういう時に濃くなるとも薄くなるとも予測がつかず、月のものとは関係がなくなつたようにさえ見えるので、貞之助も氣にして、注射が利くならさせて見たらと云つたことがあり、幸子も誰か専門の人に診せて見ましようといつもそう云つてはいたのであった。が、先年阪大で診てもらつた時に、注射は何回もつづけなければ効果がありませぬし、結婚なされば直るものですからそれには及ばないでしようと言われたことがあり、見馴れてしまうとそう目障りになるほどの欠陥とも感じられず、身内の者だけが氣にするので、世間は格別問題にしていらないようにも思え、それに何よりも、当人が一向神経に病んでいないところから、そのままにしていたのであったが、あいにく今日

のように厚化粧をすると、却ってそれがお白粉の地の下から浮き上がって、斜めに透かした時に検温器の水銀のように際立つのであった。貞之助は今朝化粧部屋で彼女が繕えをしていた時から心づいていたので、今も電車の中で見ると、たしかにいつもよりまはつきりと分り、どうも眞面目に見ても人の注意を惹かずには済むとは考えられないのであったが、幸子も口には出さないで、夫が何を考えているのかおおよそ察していた。そして、最初から今度の見合いに熱意を抱き得なかった夫婦は、ひとしお希望が持てないような暗い気持ちがあるのを、なるべく顔に出さないようにしながらも、互いにそれを読み取っていたのであった。

悦子は今日の大垣行きが、螢狩だけではないらしいことを早くも感じていた様子であったが、大阪で汽車に乗り換えると、

「お母ちゃんは何で洋服着て来なんだの」と云った。

「ほんに、洋服にしたかってんけど、べべでなかったら失礼やないか思うたさかいに」

「ふうん、——」

と云ったが、彼女はそれでも合点できない面持ちで、

「何で、お母ちゃん」

「何でで、——田舎の年寄りの人いうたら、そういうこ

とがやかましいさかいに、——」

「今日何ぞあるのんと違う？」

「何でえな。——今日は螢狩に行くのやありませんか」

「そうかて、螢狩にしたなら、お母ちゃんも、姉ちゃんも、えらいおめかししてるやないの」

「悦ちゃん、螢狩いうたらな、——」

と、妙子が助け船を出した。

「ほら、よう絵に画いてあるやろ、——お姫様が太勢腰元を連れはって、長い振袖のべべを着て、こういう風に」と、ちょっと手つきをして見せながら、

「——団扇を持って、池の周りや土橋の上で螢を追いかけてはるやないの。螢狩いうたら、ああいふ風に友禪のべべを着て、しゃなりしゃなりして行かなんだら気分が出えへんねん」

「そしたら、こいちゃんは」

「こいちゃんは今時分に着る余所行きのべべがないねんもん。今日は姉ちゃんがお姫様で、こいちゃんはモダンガールの腰元や」

妙子はいよいよ二三日前に、三七日のお詣りに岡山在まで行って来たところなのではあるが、もうあの不幸な出来事が格別の創傷を心に留めていないらしく、元氣になっていた。そして時々おどけたことを云って悦子や姉達を笑わせ、砂

糖果子だの掻き餅だのの小さな罐を、手品のように次々に取り出してはこっそり口を動かしたり、皆に分けてやりしした。

「姉ちゃん、ほら、三上山が見える。——」

京都から東へめったに来たことのない悦子は、今度が二度目の近江路の景色に見入りながら、去年の九月雪子と上京した時に、瀬田の長橋や、三上山や、安土佐和山の城跡などを教えてもらったことを思い出していたが、汽車が能登川の駅を出て少し行った時分に、どかんと云って、妙な所で停車してしまった。乗客達は皆窓から首を出したが、畑の真ん中の、線路が少し彎曲している土手の上で立ち往生したまま動かなくなっており、どういう事故なのか、見たところちょっと分らなかった。機関車から従業員が一人二人降りて来て、車台の下を覗いて廻っているの、何ですか何ですかと皆が尋ねるのであるが、その人達にも原因が分らないのか、分っていないでも云わないのか、さあ、………というような曖昧な返事をして行ってしまう。五分か十分で済むものと思っていると、なかなか動き出さず、そのうちに後の列車が来て停る。その列車からも従業員が降りて来て覗いたり、能登川の駅の方へ駈けて行ったりしている。………

「どうしたんやろう、お母ちゃん」

「どうしたんやろう。………」

「何か轢いたんと違うか知らん」

「そんな様子もないようなないか」

「早う動いたらええのんに」

「間が抜けた汽車やわ、こんな所で停るなんて、………」幸子はさっき汽車が停った時、何よりも先ず、人が轢かれた、———と思っはったのであったが、でもまあ、いい塩梅に、そんな縁起の悪いことではなかったけれども、………しかし片田舎の支線とか、私設線ででもあることか、こういう主要な幹線の線路上で、汽車がこんなにも長く、三十分以上もの間原因不明の立ち往生をするなんて、よくあることなのかも知れないが、あまり旅行の経験のない彼女には、何だか不思議な出来事であった。それも、誰の眼にも明らかな事故の発生がなしに、だんだんに徐行し始めて、最後に、ひとりでに、どかんと停ってしまったのが、いかにも恍けたような、滑稽な感じで、あたかも汽車が今日の見合いを交ぜっ返してでもいるような、………それというの、いつもいつも、雪子の縁談とか見合いの日とかというと、不吉なことや変ったことに打つかる例が多いので、今度も実は何事もなければよいがと、この間から懸念していたところであったのに、………そして、今日は仕合わせに、滞りなく汽車にも乗り込めて、どうや

ら無事に済みそうであると、ほっとしかけていたのであったのに、……やっぱりこんなことが起きたかと思うと、幸子は自然自分の顔が曇って行くのが、自分にも分るような気がした。と、妙子が、

「何もそんなに急ぐことはあれへん。汽車が一服してる間に此方もお弁当使うたらええがな」と、わざと冗談めかして云った。

「——こない停つてくれた方が、御馳走がゆっくり食べられまっせ」

「そやそや、今のうちに食べてしまおう」と、幸子も氣を引き立てて云った。

「——この陽氣やったら、早うせなんだら御馳走の味が変りまっせ」

彼女がそう云っている暇に、妙子はもう立ち上がって網棚の上の籠だの風呂敷包みだのをおろしていた。

「こいさん、出し巻の玉子、どうもなつてえへんやろか」

「それよりクラブサンドウィッチが怪しいで。この方を先に開けよう」

「よう食べるなあ、こいさんは。さっきから口を動かさしづけやないの」

雪子は姉と妹の、それとは云わぬ心づかいなど、とんと氣に留めてもないらしい口調であつたが、汽車はそれから

また十五六分過ぎて、迎えに来た機関車に牽引されてようやくゴトゴト動き出した。

三

この前、この姉妹達が茸狩に招かれたのは、幸子が娘時代を送った最後の年の秋のことで、当時すでに貞之助との婚約が調つており、その二三月後に式を挙げたのであったから、それは大正十四年で、今から十四年前、幸子が二十三、雪子が十九、妙子が十五の折であつた。その頃はまだ未亡人の連れ合いが生きていて、この人の諍りが殊に著しく、この地方特有の、「たい」を「てやあ」、「はい」を「ひやあ」という風に発音するのが可笑しくてたまらず、老人の口からその音が出る度に三人眼を見合せて死ぬ苦しみをしているうち、「先祖のお位牌」と云うのを「先祖のおひやあ」と云った途端にとうとう笑いを爆発させてしまい、義兄の辰雄に苦い顔をされたことを今も覚えているのであるが、辰雄は関ヶ原役の軍記物などにも名が出ているという郷土の菅野家を親戚に持っていることが、よほど我慢であるらしく、機会があると此処へ鶴子や義妹達を引っ張つて来たがったものであつた。そして附近の古戦場や不破の関趾などを得意になつて案内するのであつたが、最初に来た時は夏の盛りで、埃っぽい暑い田舎路をボロボロの